
幻夜華

LEIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夜華

【Nコード】

N1397E

【作者名】

LEIN

【あらすじ】

荒くれ者の父に育てられた松助と梅吉。父が死に、松助と梅吉は顔も知らぬ母親の下へと向かう。美しい母親の出現に、二人の兄弟はとまどうが…。

まえがき

小説の

神というものがおられるのならば

できるだけ忠実に

忠実に書いていこう

誰の為にでもなく

正義の為にでもなく

悪を助ける為にでもなく

義憤の為にでもなく

しがらみと欲得の為にでもなく

只々

神の現われとしての絵画が存在する

この短い小説もそうあるべきである

あの時が呼んでいる

僕はその時、まだ10歳だった。

親父はいつも呑んだくれていた。

畳みに座り、勢いのよくバアン！と手を叩き付けた先には、30代前半の鋭い眼光の細目男が皆を睨む。その手に握られたものから賽が二つのぞくと、親父は「畜生め！！」と胡坐の膝を叩いた。

僕は隙間を開けた障子をパタンを閉めると、溜息をついた。

今日も親父は荒れるだろう。

なんで博打なんてもんがこの世にあるんや！

博打さえなければ、こんな明日の飯もわからぬ生活をせんで済んだのに。

誰が考えたんや。

どうして生きるて事には、こんな罠があるんや。

親父を憎いながらも憎みきれない。

その頃の僕は幼いながらに、「不条理」ってものを知ってしまっていた。

親父は女もよく連れてきた。

僕がまだ外で棒切れを持って遊んでいると思ったのだろう。

荒い息遣いが聞こえると、そこには着物の裾から艶めかしく白い脚をのぞかせた女がいる。

僕は驚き、急いで逃げ出した。

川に座り、僕は汚いランニングに短パンで、文字を書いていた。

「バカヤロウ、バカヤロウ」

何度も書いては消し、書いては消した。

ふと、何かを感じて川を眺めると、川に何か太陽の反射のような白く眩しいものが光った。

しばらく見つめていると、それはまた光った。

太陽の反射にしては眩しかった気がした。

それを見ているうちに、僕の胸の中の暗い気持ちが一瞬と白くなった。

不思議だと思いながらも、子供はそんな事を長く意に介さないものだ。

毎日、親父に殴られ、酒瓶が飛んで来ようとも、今の僕よりずっと遅しかったとすら思う。

その分、喧嘩で発散していたのだから。

自慢じゃないが腕っぷしは強かった。

誰にも負ける気がしなかった。

さすがに僕より頭一つ以上、背の高い年長の者が3人がかりで大きな石を持って殴りかかってきた時には参った。

僕はあばら小屋まで駈けていった。三人は後ろから疾風のように追ってくる。

あばら屋を背にすると、ひよろ細い奴がニヤリと笑った。

ケツ、畜生め。

さあ、誰が最初に襲いかかるか、奴らは互いに気配を計っていた。

一番小さいのが、うわあ、と叫びながら襲いかかってきた。

奴の握り締めた石が頭に降りかかってくる。

さあ、どうする。

このままじゃ頭が力チ割られてしまう。

おののきながらも怖気づいたら負けだ。

僕は瞬間、サツと身を屈めた。

見上げると奴の手はバリバリと音を立てて、あばら屋にめり込んでいた。

木のギザギザが腕に刺さっているのだろう。

「ギャアアア」と悲鳴が頭上から聞こえ、真っ赤な血が、ぼたぼたとしたたっている。

そいつの腕を余計に木にめり込ませてやる。

「うわあああ」

僕の目は鋭い土佐犬のように、狂ったようにそいつの腹に突進していく。

「た、頼むから、勘弁してくれ…」

とうとうそいつは観念した。

あとの二人は、呆然としながらその場に立ち尽くしていた。

「こ、こいつは基地外や」

石を捨てて、哀れな友も見捨てて、後ずさりしながら、逃げていく。

「なんて奴らや」

気を失って、壁にひっかかっている「そいつ」を、木の芽に逆らわないようにそつと外すと、地面にそつとおいた。

憐れみにも似た、おかしい感情が僕の心の底から湧いてきた。

今は争ったが、こいつも俺と同じ、惨めな人間なのだ。

あばら屋の反対側ならば、誰かが気がつくだろう。

反対側まで、そいつを引き摺っていき、そつと置いていった。

父の死

しばらく経った頃、あいつをみかけた。

腕をぐるぐるに縛っている。

あいつは怯えた目をしながら、今にも逃げ出しそうに身を縮こまらせている。

僕が思い切り睨みつけると、そいつはこそこそと逃げるように道を折れて行った。

あの頃は怖いものなんてなかった。

ただ、奇妙な「この世」というものが僕の前で混沌として広がっていた。

あちこちで人が死んでいた。死にゆく者は惨めに死んでゆく。

貧困の為、火の不始末の為、病の為。

そして僕の目の前で妖しく繰り広げられていく性の世界。

戸惑い、困惑しながらも、それが本当に意味するものを僕はまだ本

当に理解できていなかった。

あの時までは。

僕を殴り続けた親父が、あの日、ころっと死んでしまった。

酒瓶が右手の先に広がり、目をかっと見開いていた。

目は充血し、どこを見ているのかわからないが、天井を剥いている。

僕は障子に寄りかかったまま、座り込んだ。

手がガクガクと震える感覚を、産まれて初めて感じた。

親父の葬式は親戚がやってくれた。

と、いつかその時まで僕は、自分に親戚がいる事すら知らなかった。

僕は何が何だかわからないままに親父の死を迎えてしまった。

正直、悲しいのかもわからなかった。

死の現実味というものがまったくわからなかった。

本当は泣かなければならないのだろうと、幼心にもわかってはいたのだけれども。

代わりに思い切り睨みつけて、灰を顔に投げつけてやった。

上品ぶったこざかしい奴ども

「まあ、なんて子や」細面の上品な化粧をした50近くの女が言う。
「未恐ろしいおますな」

「こどもやから、何がなんだかわからんと、投げつけたんやろ」

「しかし」一人の中では上品そうな顔をした男が腕を組む。

「この界限では手のつけられん暴れん坊やというやないか。」

「兄貴の方はそら大人しいもんやけどな」

「兄貴はいくつや？」

「16や、確か」

「とにかくこの子らをなんとかしてあげないといかんのと違っ？」

「そやけど、うちも手いっぱいやしなあ」

貸本を読んでいるふりをしているても、話し声は嫌でも耳に入ってくる。

本当に無神経な奴らだ。

子供だからわからないと思ひ込んでいるんだ。

でも、大人が思うほど物知らずなわけがない。

のほほんと生きてきた、あんた達よりはよほど僕の方が物がわかる人間や。

自分とは縁の遠い、綺麗な着物を着て話合っている奴らの方が、僕らよりもよほど汚い神経の持ち主なんや。

話はあっちの家、こっちの家に飛び、お互いが誰かに押し付けようとしていた。

そうか。親を失った子供は「お荷物」でしかないんや。

僕はその事実をはじめと感じ、心がズタズタに裂けるような衝撃を受けたのを覚えている。

僕は外に出た。

家からしばらく離れたところまできて、やっと我慢していたものを、ひつくひつくとしゃくりをあげた。それでも絶対に涙は流さないようにした。

「どうしたん？」

サチ子という9歳の女の子が声をかけてきた。

「なんでもない。ちかよらんという」

「なんでもないで嘘や。」

サチは僕の背中をさすった。

「な、川辺まで連れてって」

「しゃあないな。一人でいけんのやろ」

「そうや。うち方向音痴やけえ」

どうにか「泣く」というはめにならんと心も落ち着いてきた。

サチと僕は川辺に座って、流れる水を眺めていた。

「なあ」

「うん？」

「どっか遠くに引つ越すん？」

「なんでや」

「うちのお母ちゃんがそういうてたから。誰か親戚の所に貰われて行くんやろなって…。」

僕は立ち上がって小石を川に投げ入れた。小石はぽんぽんぽんと、三段跳びで跳ねていく。

「どうせ孤児院にでも送るんやろ。」

「なんで？」

「別にええねん。あいつ等は俺らがきてほしくないねん。」

「そんなんやったら、親戚なんかいらんな」

「ええねん。俺は誰もいなくても生きていけるねん。」

「い飯はどうするん？」

「生えてる草あるやか。あれを食べたら生きていけるやん。」

「それもそうやな」

サチの目が楽しそうに輝いた。

実際は草だけじゃ生きていけないのだけれど、その頃はそんな事は知らなかった。

ただ、これだけは確信があった。

僕はどうやっ たって生きていける。

必ず生き抜いていけるんだ、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1397e/>

幻夜華

2010年10月8日23時49分発行